

簡易版 TP（ティーチング・ポートフォリオ）

氏名	森 裕一
所属機関名	経営学部 経営学科
職位	教授
在籍年	28 年

教育の責任

経営学部経営学科のビジネスデータサイエンス系の科目を担当している。1 年次生は基礎科目である「統計学基礎」、2 年次生はオープンデータの 2 次利用を中心とした「マーケティングデータ分析 1」と多変量解析の入門である「ビジネスデータ分析」、3 年次生はデータ解析コンペティションや実社会の問題解決に取り組む「イノベーション・ラボ」（3 年ゼミ）、4 年次生は「卒業研究」である。マーケティングやスポーツなどあらゆる分野でデータを処理できるように、その基礎と応用を身につけさせる教育に責任をもっている。

教育の理念

教育の基本にしていることは、学問を役に立つものとして身につけさせることである。学ぶ内容は頭の体操のためではなく、市民生活や社会の問題解決のために使うものであることを理解し、実際に使っていけるように、学問の理論体系よりも目の前の学習者の認識を基にして、教材とその提供順を決めて教育することを理念としている。現在担当しているデータサイエンス系の分野では、このことは体得させやすいが、この理念はすべての分野において踏襲したい考えである。したがって、データサイエンスにおいても、現実問題を扱うことだけにとどまらず、データを見る目の育成と分析結果を基に行動を起こすことができる力の伸長を常に意識している。そのためには、これらによる学習内容の定着の把握することが必要であるので、こまめに確認を行い、柔軟に進度や内容展開の修正を行うこととしている。

教育の方法・方針

主として座学となる基礎系科目は、各時間の内容を 1) ミニマム・リテラシー（確認）、2) メイン・コンテンツ（知識）、3) ナレッジ・アップ（実力）の 3 つのパートを設け、提供している。1) では、関連するトピックスの紹介と前回の確認テストのフォローをし、2) では、日常会話と関連させたり、身の回りの事象や将来遭遇する事案を例に上げたりして、学ぶべき内容を提供する。3) では、授業内容の確認とともに統計検定などの問題から関連する問題を出題し、知識の定着を図る。学習内容の定着具合は毎回の確認テストで把握し、指導の軌道修正を適宜行う。

実習をとまなう応用系科目では、Excel や統計解析パッケージ R を扱うが、その操作習得よりも、操作前のデータの様相の把握と操作で出力された結果の解釈に重点をおく。分析には、オープンデータなどの公的データ、民間が提供する実データ、解析ストーリーのデータベースからの分析事例を用い、多様化するビジネスの実務で要求されるデータ分析のスキルと理論が身につくように心掛けている。個々人の理解度チェックはすべてレポートで行い、理解不足の者にはレポートの再提出と個別指導を行い、一定水準以上を保つようにしている。各科目の最後には、自ら設定したテーマでデータ分析をしてポスター形式にまとめる課題や与えられたデータを指定された手法で分析を行う総合演習により、活用力・応用力をつけるようにしている。

教育の成果

授業アンケートの総合評価（満足度）は全科目とも否定的回答は0であり、自由記述には多くのコメントが入れられている。1年次の基礎科目では、授業中、理解は大変そうであったが、「難しかった」より「詳しく知りたい」、「できるようになった」、「これからも学習していきたい」というコメントが多く、内容への関心を高めることができていると考えられる。2年次の応用科目では、理論やPCの操作は難しかったものの「PCやデータを見つける技術は身についた」といったスキルに関する記述が目立っており、使えるツールとして意識されたことが確認できる。3年次のデータ解析コンペティションへの参加では、毎年、数名がグラフコンクールで優秀賞を獲得し、データ利活用コンペティションでは4年連続最終審査に出場するなど、他大学との競争の中で、テーマに従った課題解決や大規模データを分析する力をつけることができている。これらの経験を基に、4年次では、根拠とデータに基づいて研究をまとめていく卒業研究ができている。

今後の目標

次の3つを今後の目標とする。

- ・下位層と上位層のフォロー：下位層については、上記で述べた通り、こまめな対応を継続するが、途中で挫折したり、課題の提出が遅れたりする学生も一定数いるので、彼らに対して早めのケアをすることを行っていく。一方、上位層については、これまで特段の対応は行っていなかったが、その能力をもっと伸ばしてほしいことから、追加課題やより高度な分析に挑戦させたりすることを考えていきたい。

- ・真偽を確認する態度の醸成：批判的に見る目をしっかり養うということであるが、今後ますます利用が増えてくるAIの存在を前提に、事例を示すときやコンピュータの出力を解釈する際に、その正しさについて目を向ける場を設け、意識を高めたい。

- ・各自の考えのリアルタイム共有：ある事柄について考える場面で、クリッカーアプリやmylogの授業支援機能を使い、互いの考えを共有し、より深く考える機会を増やす。

上記の内容は授業中に行うだけでなく、現在行っている授業録画のVOD公開に、そのコンテンツも加えていくことで、定着を図りたい。

根拠資料

- ・授業アンケート結果
- ・授業資料「統計学基礎」、授業コンテンツ (<https://mo161.soci.ous.ac.jp/@d/indexj.html>)
- ・コンペティション各Webサイト（岡山県統計グラフコンクール／和歌山県データ利活用コンペ／スポーツデータサイエンスコンペティション／経営科学系データ解析コンペティション）